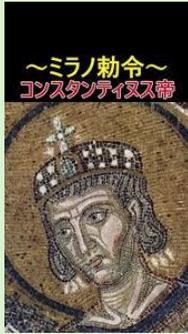


豊明希望チャペル礼拝

2026/2/22

「すべてのことが神から」

ローマ人への手紙 11 : 33～36



本日(2/22)、ミラノで開会式が行われたオリンピックが終わりません。

以前、お話ししましたが、ミラノは、ミラノの勅令が出た地で、この名は、キリスト教会にとって、特別の意味があると、お話ししました。紀元 313 年、クリスチャンとなった、ローマ皇帝コンスタンティヌス 1 世によって、それまで続いた、激しいキリスト教に対する迫害が終わった、その地だとお話ししました。

キリスト教会に自由が与えられて、その結果として、様々な祝福が教会とクリスチャンにもたらされましたが、その一つは、キリスト教史における巨人アウグスチヌス(354～430)が登場したことかもしれません。ミラノの勅令が出た年の 40 年後に、彼は、アフリカで生まれました。彼の書いた本で、『三位一体』という本がありますが、聖書の考え方の基本を示した神学書であります。神学校で学ぶ人間にとっては必読書ですので、必死に読んで・・・少なくとも、格闘したことを思い出します。三位とは、キリスト、父なる神、御霊の三つで、それが、しかし、一人の神だという、聖書の柱となる神観を示す言い方です。



ザッと読んで、私の結論は、「よーわからん」でした。一番わかりやすい説明は、「 $1+1+1=1$ 」という数式に表されると言いますが、要するに、そんな数学の公式、見たことも聞いたこともないという論理だという意味です。すなわち、よくわからんという感想は、

それはそれで正しいという事ではありません。

そして、色々、考えていて、たどり着いた私の結論は、神さまは、私たちの考え、想像をはるかに超えた存在であるという事です。この世のいかなる被造物でも説明出来ない(いにしへの神学者達は、三角すいやら、水と氷と気体の三様やらで説明しようとしたがいずれも、説明不可能だった・・・)、想像が及ばないと言うことです。

こんな逸話が残されています(加藤常昭『ローマ人への手紙 3』p444)。ある日、夢の中で、彼が海辺を散歩していたというのです。すると、波打ち際で、小さな子どもが、貝を拾っているのです。そして少年は、貝を手にとって、海の水をすくって、自分が掘った砂浜の小さな穴に、その水を入れているのです。アウグスチヌスは、少年に聞きます。何をしているのか?と聞くと、「僕は、あの海の水を全部救い出したいんだ」と答えたのです。アウグスチヌスは、そんなバカなことが出来るはずがないと言うと、少年の顔つきが、神の顔のように、天の輝きに満ちて、こう言ったと。『お前は、



今、三位一体について、わたしのことについて書いてあるそうだ。お前のその小さな頭脳、貝殻にも似たその脳で』と。

本を書いていいが、それで、わかった気になるなよと言う神さまの警告だったと彼は受け止めたのだということです。どんなに説明しても説明し尽くせない、そこには、知恵の深さと言いましょうか、神さまの偉大さ、人間の考えを超えた神の存在があるということです。

その三位一体の本を読んで、私が、もっとも教えられたことは、彼が、わからないのは、神の存在だけでなく、この世のすべての被造物についても、実はわからないのだという事です。分かったようになって、やっぱりわからない、その不思議が、神のつくったものにはあるという事でした。それを彼は、三位一体の理論で、その「わからない」という物差しで、測ろうとします。「わからない」そこから始まって、科学

摂理、神の配剤、Providence、御心の混在？

は、発展するのだと思いました。そして、さらに後の世代の人が、それでもわからないと疑問に思ってさらに発展するのだと思いました。

アウグスチヌスは、そうした被造物だけでなく、歴史も、そのような三位一体的な理論で考えるべきだと言いました。その一つのキーワードが、摂理だと彼は言います。彼は、歴史の中に起きること、あるいは、もっと短く、私たちの人生という歴史の中に起きることは、ちょうど、絨毯を後ろから



から見ているようだと説明しました。

じゅうたんを裏返してみなさいと。じゅうたんを織っている時は、裏を見ておるそうですが・・・その裏は、ぐちゃぐちゃの、模様には見えない、カオス、ただ混乱だと言います。むしろ、そこにあるのは、矛盾であり、不条理だと。しかし、完成して、表に返してみると、見事な模様になっていると。それが神の摂理だと。前置きが長くなりました。今日の箇所をあらためて読みます。

「11:33 ああ、神の知恵と知識の富は、なんと深いことでしょう。神のさばきはなんと知り尽くしがたく、神の道はなんと極めがたいことでしょう。」

ここまでで、パウロが、その知恵の深さ、知識の富と言うのは、9章から、ここまででパウロの説いてきた、ユダヤ人と異邦人の問題のことです。特に直近のところでは、ユダヤ人が捨てられて、異邦人が選ばれたことも、不思議で信じがたい神の計画で、またはかりがたい程の神の愛の深さであるが、その捨てられたはずのユダヤ人も神は、そのことを通してむしろ救いをもたらせる。そして、人類が聞いたことがなかったような、あらゆる宗教が民俗宗教であった時代に、すべての人間が救われるという計画が神にはあるという、誰も想像も予想もつかなかった、神の計画がある、それ

が、主に、ここでいう、神の道であり、極めがたい、人間の力では理解しがたい、知恵と知識だと言っているのです。そして。

「11:34 「だれが主の心を知っているのですか。だれが主の助言者になったのですか。11:35 だれがまず主に与え、主から報いを受けるのですか。」

ここでは、人は神に何を教えることは出来ず、人は神から教えられることをもってしてだけ、教えられるのであって、それは、神の一方的な恩寵(報い)だと言うのです。

アウグスチヌスに言わせれば、神の被造物である人間が、人間の側から、神を理解出来るはずがない、神が教えて下さった分だけしか、神についてはわからないということであります。



動物を研究しておられる方々がこの教会におられますから、口幅ったいのですが、辞書を見ると、犬の、「色の見え方は、・・・」とそんな風に、人間の見え方とは違うと言います。そんな犬に、たとえば、人間の三原色の色の見え方を、どんなに詳しく説明しても、おそらく、まったく理解出来ないように、パウロの、このいい方は、もちろん、それ以上に、創造者のことを、被造物である人間が、創造者以上に理解し、助言するなど、傲慢だと、私たちは、ただ、一方的に神の恵みを、知恵を受けて生きているのだと、そういう言い方だろうと思います。

そして、この神の知恵とは、神の一方的な恵みのようなものだ、そういう知恵だという言い方は、こうゆう究極的な言い方になるのだろうと思います。

「11:36 すべてのものが神から発し、神によって成り、神に至るのです。この神に、栄光がとこしえにありますように。アーメン。」

さて、すべての被造物が、人も宇宙も、存在そのものが、神から生じる。「神に至る」すなわち、すべては、神に集約するように出来ている。神がゴールであるように作られていると言うことです。

パウロが、8:19 で言いましたように、「**8:19 被造物は切実な思いで、神の子どもたちが現れるのを待ち望んでいます。**」と、人間が救われて神の子どもとなるように、言わば、神の下に帰るように、それは、人間だけではない、「**すべてのもの**」が、被造物が、神がゴールであるようにつくられているということです。あるいは、神の栄光を現すためにつくられているということです。神の下にゴールしてこそ、その被造物の行き着く先、いきたいところがある、そんな言い方になるでしょうか。そう言っているのです。

さて、ここまで、パウロが、異邦人とユダヤ人、その救いということを 9 章から教えられてきて、そのまとめというところになります。

ただし、ここまで、この御言葉の意味をみてきて、私は、おそらく、すごく大事な事を落としているし、パウロの、この詩にも似た、すべてのものは神から発し、神によりなり、神に至る・・・と感激し、「ああ」と、感嘆詞を添えて、こう言ったこと。

「11:33 ああ、神の知恵と知識の富は、なんと深いことでしょう。神のさばきはなんと知り尽くしがたく、神の道はなんと極めがたいことでしょう。」

パウロの特別の感動を伝え切れていないのだろうと思います。

私は、パウロの気持ちを思うのです。パウロが、9章で、「**9:2 私には大きな悲しみがあり、私の心には絶えず痛みがあります。**」と言い、そして、私たちがつまづくような言葉、おそらく、これが彼の本音というか心情だろう言葉、「**9:3 私は、自分の兄弟たち、肉による自分の同胞のためなら、私自身がキリストから引き離されて、のろわれた者となってもよいとさえ思っています。**」と言った彼の思いです。

どう考えても、ユダヤ人ではなく異邦人が選ばれている。律法ではなく信仰の方法によって、すなわち福音によってこそ救われている。異邦人にはそれがわかる、しかし、ユダヤ人には分かっていない。ユダヤ人であることは、選ばれている、救われていると言う事にならない、そのような真理を宣べながら、彼は、非常につらい思いだっただろうと言うことです。しかし、きっと、ユダヤ人も、この福音によって、異邦人が救われるのを見て、ああ、自分たちのように、心が固く、にぶい人間であっても、救われるのだと気づいてくれることもあるかもしれない。いや、私には見えていないが、その計画がきっと神さまにはあるのだ、なぜなら、その「福音」こそが、その神の恵みの教えなのだからと気づいたとき、本当に救われた、自分たちも、完全に見捨てられたのではないのだと気づいた、その知恵、その知識の富に、彼は、「ああ」と感嘆をあげ、感動しているのだろうと言うことです。

私が、40年前に、牧師になって、最初の思い出深いことで、夏の英語クラスを数週間でしたか、するという時を持ちました。その時、アメリカから一人のクリスチャンの青年を迎え、牧師館の一室に泊まっていただき、生活を共にしたのですが、その時、アメリカのニューヨークから来た彼は、ユダヤ系のアメリカ人でクリスチャンでした。たしかユダヤ人の家庭に育ち、クリスチャンとなられた方でした。とても良い関係を築かせていただき、アメリカに帰ってからも、多額の献金を、幼稚園の働きのためなどに送っていただきました。英語が不十分の私でしたので、宣教師に訳していただきながら、その後も、交流をしましたが、悩み事なども打ち明けていただきました。その宣教師が、この手紙は、内容は忘れてしまったのですが、普通ではない、本当に愛のこもったものだと言われたことを思い出します。

多少なりとも、その時、ユダヤ人から見た聖書、イエス様、そういう事を、経験させていただきました。また、私の仕えた青梅市が、ドイツの都市と姉妹都市で、また、リーベンゼラの宣教師と共に歩んだことで、ドイツ人の宣教師やクリスチャンが、たびたび、イスラエルで夏の奉仕をし、活発にユダヤ人と関わっておられる様子も見てきました。姉妹都市の方々は、必ずしもクリスチャンではなくて、私の肩を組んで、「また、一緒に戦おうぜ」と、日独が、連合軍と戦った、そして、あのユダヤ人の迫害を思い出すような、ドイツと同じ、そちら側に、日本もいたんだと・・・そんな時も経験させていただきました。異邦人とユダヤ人、パウロの痛みの、万分の一も想像出来るはずはないのですが、歴史の背後にある神の摂理、見えないけれど、つながっている、そして、神の知恵がある、神の愛がある、すなわち、神が、結局は、前回の最後の箇所、「**11:32 神は、すべての人を不従順のうちに閉じ込めましたが、それはすべての人をあわれむためだったのです。**」と、異邦人もユダヤ人も不従順な罪人、しかし、それ

でも、やっぱり、ユダヤ人も異邦人もすべての人があわれまれている、愛されている、すべての人が救われることを神は考えておられる、求めておられる、神さまのあわれみとその摂理を思うと言うことであります。

この数年を考えても、平和の方向に向かっているととても思えない世界。災害も、その悲しみを忘れようとする前に、またやってくる。そんなこの 21 世紀の歩み。しかし、そんな、人の思いの届かない、自然と歴史の背後にもたしかに神がおられる。愛を持って、あわれみをもって導いておられる、そのことを、あなたのその、頭で考えて、あきらめてはダメだ、信じるべきだと、神の計画は深いと、愛は限りないと信じるべきだと、信じて、祈るべきだと、そんな事も思わされるのです。



御言葉からしか歌を作らなかったバッハは、その楽譜の最初に JJ、Jesu, juva = イエスよ、助けたまえ)と書き始め、作曲し終わると、感謝をこめて S.D.Gl. (Soli Deo Gloria = 神にのみ栄光を)とサインしたと言われます。パウロが、「11:36 すべてのものが神から発し、神によって成り、神に至るのです。この神に、栄光がとこしえにありますように。アーメン。」と

締めくくる、この週でありたいと願います。